

『一即五成十化更始』翻刻

大谷正幸

凡例

- 一、この『一即五成十化更始』翻刻の底本は家蔵の版本を使用した。
- 一、国立国会図書館所蔵本が「国立国会図書館デジタルコレクション」として公開されており (<https://dlndi.go.jp/info:ndljp/pid/815253>)、適宜参照した。
- 一、漢字は、原則としてユニコード上で表現できる字体のうち、その表記に最も近いと思われる字を個別に選び、正字体(旧字体)・略字体(新字体)・常用漢字などの文字群にとらわれずに用いた。扁や旁などパーツの一部だけが似て判断に悩む場合も多く、その時は恣意的に字形の近いものを選んだ。異体字セレクタを含む文字は編集上の都合から使用していない。
- 一、変体仮名は原則としてひらがなに翻字する。「セ」「ニ」「ハ」「ミ」のように片仮名を用いている場合はカタカナとする。
- 一、疊字は底本にあるままに使い分けて翻じた。

一、ルビについて。本字に対するルビの間隔については、底本に似せてはみたが完全に再現しきれていない。「文字らしきものはあるが、参照できる版本のいずれもが印刷不鮮明につき判読できない」ルビには「□」を付した。明らかな誤記もそのまま注意喚起の記号などを付さずに翻じた。

一、底本に句読点は一切無いので、読みやすくするためこれらを施した。句点は文章の末尾に付した。読点は翻刻者の「読み」を極力示さないよう留意しつつ恣意に付した。読点を付したポイントは概ね以下の通りである。

- i 列挙により読点がないと混乱しやすいと判断された時
  - ii 文節の内容が完結しているものの句点で切りにくいと判断された時
  - iii その他、読点を挿入しないと読みにくいと判断された時
- 一、底本には改行は一切無いので、文意を元に改行と段落を設けた。段落の第一文は一字下げとした。ただし巻末の縁起部分のみは底本を模して段落ごと一字下げとするとどめた。
- 一、割書はそのような処理とせず、単に文字の級数を一回り小さくすることで表現した。長いものを改行して段落としたが、第一文を一字下げにはしなかった。
- 一、丁数とその表裏を示すため、先頭に「二表」(2丁の表を示す)などとマーカーを挿入した。
- 一、七丁裏の「圓圖」は、位置を原文と合わせた。
- 一、底本の封面と巻末広告、家蔵の別の版本にある表紙(題箋付)を図として挿入した。

權少教 正実野半賛説  
權訓導伊藤六郎兵衛原説  
扶桑教會編輯掛礮稻綺尢著述

全一冊

一即五成十化更始

明治十三年第三月 扶桑教會丸山講社藏版

〔一表〕

一即五成十化更始一

神道扶桑教會大教主權少教正実野半賛説

扶桑教會丸山講社總長伊藤六郎兵衛原説

扶桑教會一等講師兼編輯掛礮稻綺尢著述

神典に天御中主神と曰ひ、漢籍に上帝或ハ天帝と云ひまた無上至尊に坐ますを稱奉りて天神之貴者莫貴於天一或曰大陰とあるハ、全ラ我が大祖參神の御事にして此神や陰陽兩徳を總持して幽邃玄妙の大徳を具備し恒に靈「二裏」氣をして大虚に盈滿せしめ以て生成の道を脩め万物を化育し日月星辰國土ハ更なり神人草木禽獸 蟲魚風雨霜露寒暑晝夜古往今來顯世幽界に至るまで万物皆悉く天一の神機に據て始まる者なり。

抑も天一ハ陰陽を活潑するの機軸なれば天一の天神即ち大祖參神の神機力を以て陰陽活潑なさしめ給ふ故に、水ハ木を生し、木ハ火を生し、火ハ土を生し、土ハ金を生し、五元始めて整ひ而して水ハ火に克て、火ハ金に克ち、金ハ木に克ち、木ハ土に克ち、土「二表」ハ水に克ち、五元交生し五元交克ち全く十數に了りて一

に復し亦一に始まる者なれば木火土金水の五元始めて万物繁成するに功用を爲す者なり。

然れハ水を掌るに彌都波能賣神等あり、火を掌るに迦具土神等あり、木を掌るに久能智神等あり、金を掌るに金山毘古神等あり、土を掌るに波迦夜須毘賣神等あり、辭分ては五穀を掌るに大宜津比賣神等あり、野草を掌るに鹿野野比賣神等ありて分掌主宰するも其統る所ハ一にして彼の諸神を使役し「三裏」給ふは、即ち朝廷にして大臣參議より郡戸長に至るまで凡百の官吏を置かると同じく百神有職の大原を掌握し給ふは乃ち大祖參神に坐して百神悉く神詔を奉じて之が主宰たることを得る者にして敢て自ら恣に主宰となるの神ハ一神も之れあることなし。

而して亦日月星辰國土を主宰する神の神命を奉じて百事を分掌する所の神も亦之なり。是を彼の官省に譬ふれば官省必ず之を主宰するの長官在り、また長官に附庸する属吏あり、属吏ハ「三表」能く長官を輔けて事務を整理するを以て職とし長官ハ其功大に積んで國家を経綸するの大業を翊賛するに至るが如く百神も亦其職を奉じ主宰の神を輔相し大祖參神の造化に參與することを得せしむるなり。

嗚呼宏なる哉、日月星辰國土を主宰する神德微妙の神の如きに至りても尚大祖參神の大德に因て其職を奉ずるを得て、而して大祖參神の靈德無涯不測なるハ實に言辭の及ぶ可にあらざり、況や詞章を以て其萬一だも述べることを得むや。

之「三裏」を思へば竊寐の間に於ても敬崇の意を失ふべからざる所以の神ハ特り大祖參神に坐すなり。然れば一神二神の功徳を以てハ波の五穀草木をだに生成せしむること不能者なり。如何となれば天日の光彩地氣に透和し火氣水氣種々調和して一物を化生する者なれば五穀草木繁茂して人に飲食衣服住宅を賜ふハ是亦佗神にあらざり。乃ち大祖參神の大賚よりして出る者にして之を唯に五穀豐熟するハ大宜津比賣神等の功徳より草木繁茂「四表」するハ鹿野野比賣神久々能智神また大山津見神等の功用なりと其分掌する神とし賞賛するハ草木の枝葉を識るも其幹根を知らざる者と云ふべし。

此に人在て其花の繁爛たる其香の馥郁たるを觀んと欲せば能く草木に培養せされバ見ることあたハざると等しく其根を捨て枝葉たる分掌百神の功徳を賞し其神恩にのミ報せんとする者の何でか芬芳たる花香を見ること得べき。其幹根たる大祖參神に念誦祈誓せば神詔を奉じて分掌主宰たる「四裏」枝葉の百神感應し給はんこと少か疑を容れざる所なり。

然りとて大祖參神をのミ敬せば餘神ハ卑むも可なりと云ふは非ず若し大祖參神をし敬して足るとし餘神と卑むる在らバ神理に悖るの罪人たり。其ハ天皇をのミ尊敬せば可なりとて官吏を蔑如せば乃ち國家の罪人たるを免かれざる如く終にハ敬を大祖參神に失ふに幾きを以てたり。唯畏敬するに本末上下の別を以て爲べし

況や生民に衣食住を賜ハリ。食物をタベモノト云ふハ則ち大祖參神のタマモノと云ふ言ノ略言なり。禽獸蟲魚を至るまで各自生を養ひ命を保つことを得る者にして殊更に人ハ精粹純濃最靈の氣を稟けて大祖參神の愛育を忝ふ爲すのミならず性靈を賜ひ血「五表」脈の原質を血脉の事ハ神父母參大恩といふ書籍を見て深理を覺るべし。受くる大元の父母に坐ますなり。其ハ誰もたれも其親其祖と次第に原に遡る時ハ世人悉く出自の大祖ハ天一の大祖參神に復歸せざるを得ざるなり。彼の性靈を云ふハ即ち大祖參神の大虚中に充塞する所の靈氣中恍惚たる神精より賦與し給ふ所にして亦大祖參神の主宰し給ふ所なり。是を以て顯世に生るも終に都天に還原するもミナ大祖參神の爲す所に係りて自餘の神之を指揮するを得べき者「五裏」にあらざり。

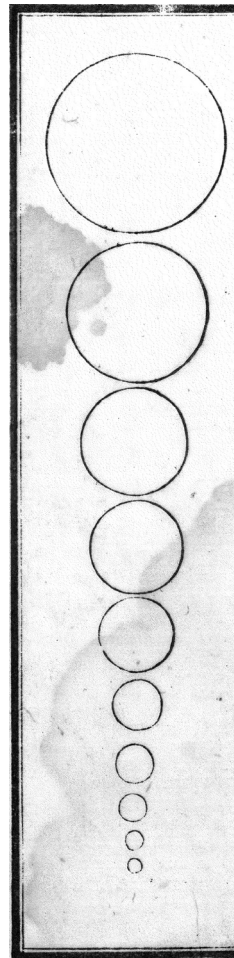
然れば俗間に歸依信仰する阿弥陀如来も觀世音菩薩も地藏菩薩も其他の如来明王菩薩々々不動閻魔の類に至るまで大祖參神の陰陽活潑して五元を十化なせしめ給ふ。神力に據て木佛金佛石佛等の像を製造する者なれば大祖參神に對し奉りて彼佛菩薩を念ずる題目念佛或ハアビラウンケン等の如きを唱誦するハ喻へバ其父母より血統を受繼のミならず財産を讓受りし子孫として養育の恩財産の思ハ思はずして、此家ハ工匠の造「六表」れるなり、此疊ハ疊職の敷しなりと父母の前をも忌憚らず彼の職人を贊美して之を朝夕の談話と爲す者の如し。

父母の子孫を愛育する情深き故に父母の恩を謝せずして職人等に謝するも親の心子識らずと云ふ俚語の如く父母の至情に決して惡しとハ思ハれず。適に敏智の産の子と思ひしもまだ幼子の思慮なるかと却て愛ミ惠ミ給ふハ疑なしと雖も此道理を聞たらんには懐く心せずハ在る可からざるなり。

然れば日月星辰國土長へに天に中し空に繋りて終古地に落ず、萬世位を紊さず四時行れ晝夜を爲し百物生し万物成ることを得るも皆悉く天一の神乃ち大祖參神の靈「三裏」氣を大虚に充滿せしめ陰陽活潑なせしめ給ふ。

神機力に出る彼の五元を十化し給ふ玄理より出る所にして一より十に至り十八即ち一に出て一に復る此十數の妙用何所にか到らざる所何物にか及ばざる物あらむ。人體手足の指の十箇なるハ更なり。男子の體中九穴なるも婦女八十竅にして妊娠アつて十ヶ月にして分娩するハ是れ十數生成の証徴と云ふべし。故に上古天照大御神忿怒して天石屋戸に刺籠らせ給ふ時に天宇受賣命の一二三四五六七八九十と誦つゝ舞踊給ふに天照大御神の神怒を解き天石屋戸を出「七

表 御し給ひ六合再び照明なることを得たり。亦天神の天穂日命に十種の神寶を授け若し死人在らば一三三四五六七八九十と唱して此十種の神寶を振り以て復生なさしめよと神授在りし如く、此教言の世界万物に功用を爲すこと今なほ人世日用物を箒へ日を數へ一時一刺と雖とも云ハざる人なきも即ち大祖參神の一即十化して万物を鎔造化育し給ふ靈妙不測の神徳を忘れず。御神名を共に時々刻々に誦するものハ災禍をして自然に幸福たら「七裏」しめ給ふ。之れ乃ち生民を愛育し給ふ神徳鴻大なる大祖參神の神慮より出る所なり。如此至らざる所なく盡さざる所なき大祖參神の大慈恩に報ぜんことを欲するの念なきハ人と爲すべからず。宜しく正意誠心を以て敬信報謝すべきなり。



「八表」此に五元十化して一より十に至り十八即ち一に出て一に復し亦一に始まる其一微にして漸大に至る造化十数の妙用を圖して童蒙に諭さんとす。

夫れ世に禍を來たし福を生ずるも彼の泰山之雷穿石と云へるが如く其元微にして漸積して大に至る者なれば微小なることこそ却て丁寧反覆に謹慎すべき者なり。其を近く譬て云はゞ八心思兼の思ひ量りの御恵もなく淺智もて猥りに億萬の蓄金をなさんと思ひ十圓の金を直ちに一萬圓にせんと「八裏」思ハ、必ず禍を生し産を破るべきを一二三四五六七八九十と嚴に正算し漸次にして一時の貪欲をなさずバ終に成功すべき者なり。是れ則ち造化十数の妙用を以て修身齋家の教誡たる其一を示せる者なり。人たらん者能く心して身を修め家を齋へ道を履み神を崇めて忽かせに爲すべからざる者なり。

此の圓圖や權訓導伊藤六郎兵衛の持論なるを一日我が大教主に質問せることの在りて十數ハ斯なりと論「九表」らひ定られしを傍聞せる予に著述してよと云ハるゝも天賦默懇訥にして云ふこと能はず、盲にして筆することを得ず、僅かに其萬一を述るのミ。尚委しくハ御太則問答、富士信導記、先達世話人問答、世界新教啓端略綱等に就て見るべし。

「九裏」

千葉縣平民

著述 碓 稻 綺 朮

東京芝區新櫻田町  
拾九番地寄留

出版 杖桑教會丸山講社藏版

東京芝區神明町

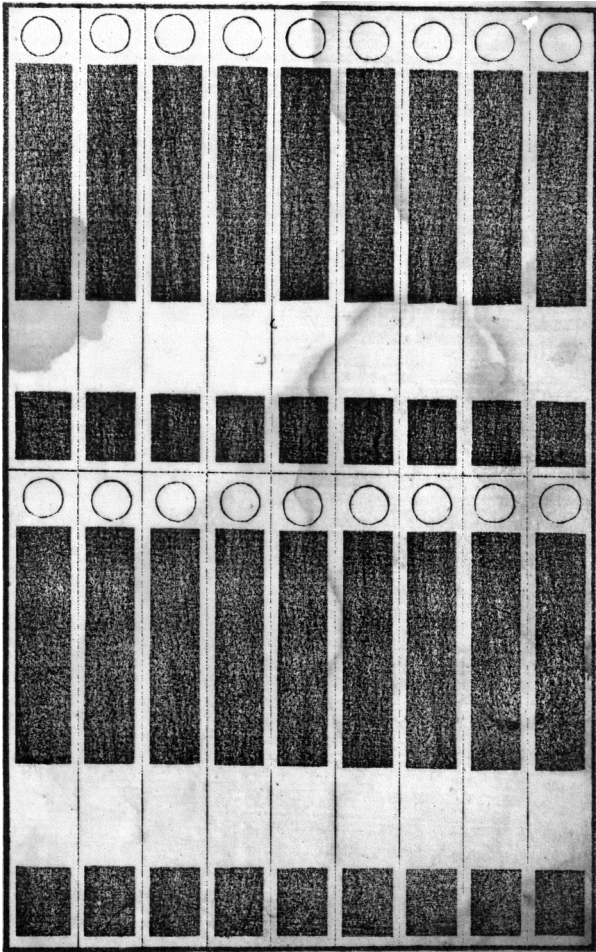
廿五番地

明治十二年八月一日版權免許

明治十三年三月十九日出版屆濟

扶桑教會必要書目錄

○ 世界新教啓端略網 <small>未刻</small>	一冊	○ 富士信導記	一冊
○ 御太則問答講釋	一冊	○ 神父母參大恩	一冊
○ 神 德 經	一卷	○ 烏帽子岩直傳	一卷
○ 先達世話人問答	一冊	○ 三條大略問答 <small>近刻</small>	一冊
○ 教 脉 略 傳 <small>近刻</small>	一冊	○ 道 の 一 筋	一冊
○ 一即五成十化更始一	一冊	○ 富士の往昔語 <small>近刻</small>	一冊
○ 改教童子問答	一冊	○ 師範之恩	一冊



一即五成十化更始一

全